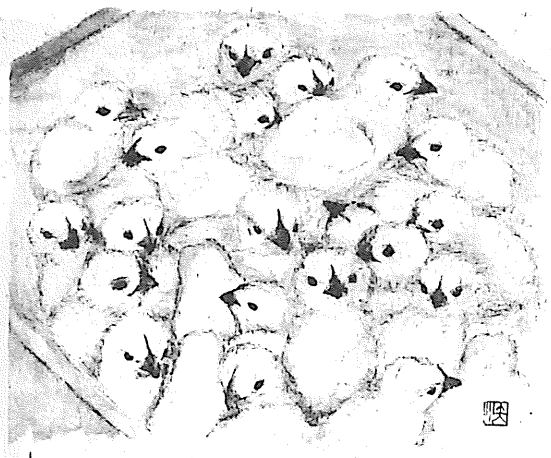
続 日本の「農」を拓いた先人たち ⑥③

西尾　敏彦

外国種に立ち向かう育種家たち

後藤静一（しずいち）と後継者の種鶏改良



後藤静一は生涯ひよこへの熱き思いを持ち続けた

【絵：後藤　決子】

わが国の鶏卵消費量は、業務用も含めて年間一人当たり330個ほど。欧米諸国が260個前後なのに比べて、格別多い。まさに世界一の鶏卵王国と誇りたいところだが、その種鶏のほぼ93%を海外の業者に依存していると聞いて、がっくりした。

ここで種鶏について説明しておこう。私たちの食卓にのぼる卵を産む鶏は実用鶏。その実用鶏は、ふつう3元ないし4元交配雑種であり、その親を種鶏、種鶏の親を原種鶏とよぶ。つまり種鶏・原種鶏の改良こそが近代養鶏の首根っこなのだが、その首根っこを「青い眼の鶏」に握られているというわけだ。

こうした状況に、わが国の種鶏がおかれるようになったのは、1962年のひな鶏の自由化以来だろう。ちょうど規模拡大が急進した時期だが、国産種鶏はこの流れについていけなかった。戦中戦後、古典的なメンデル遺伝に固執し、産卵数抜群の優良鶏はつくったが、多羽飼育に向かず、群としての安定生産性でおくれをとったのである。当時、海外では、雑種強勢をねらった複交配育種が主流で、強健性・斉一性に富み、飼料効率など経済性にもすぐれた種鶏が、すでに広く出回っていた。国内の孵卵業者が海外種鶏になびいたのは、ある意味では仕方のないことだった。

だがそんな大勢に抗し、国産種鶏の孤塁を守ってきた育種家がいる。後藤静一と彼がひきいる後藤孵卵場（岐阜市）である。静一が育種に手を染めたのは1939年、37歳のとき。はじめは近くの養鶏会社に勤めていたが、やがて独立、以後83歳で亡くなるまでの四十数年、国産種鶏の改良に生涯を捧げる。

静一がとくに意を注いだのは、新技術の導入だった。30年代後半には、すでに実用化していた蚕のハイブリッド品種に学び、名古屋種・白色レグホーンの一代雑種「名白」を育成している。今日のハイブリッド時代の先駆となったトウモロコシの一代雑種がアメリカで世に出る前、養鶏でも一代雑種は邪道扱いされていた時代のことである。研究熱心な彼は、あえてタブーに挑戦したのだった。

後藤の種鶏を今日の地位に押し上げたのは、なんといっても集団育種技術の導入だろう。メンデル遺伝学をさらに生物集団を対象に発展させた育種法だが、わが国で本格的に注目されるようになったのは戦後になってからだろう。後藤はこれをいち早く導入、種鶏改良の現場に適用している。導入の橋渡しをしたのは、静一の長男静彦だった。

52年、アメリカに留学した静彦は、ここで最新の集団遺伝学に接して、これを習得、3年後に帰国する。ついで静彦の弟悦男もアイオワ州立大学に留学、さらに新知識を吸収して帰国、同社の育種体制は格段と厚みを増していった。後藤の強みは海外研究と太いパイプをもっていることだろう。現在もアイオワ州立大学などと交流をつづけている。そうした進取の気風が、同社の主力商品、交配種「さくら」、赤玉鶏「もみじ」の開発につながったのだろう。最近の採卵鶏の調査では、国内種鶏のシェアはおよそ7%、そのほとんどを後藤孵卵場の種鶏が占めている。

「日本に適した鶏は日本人の手で、日本の気候風土の中から生まれなくてはならない」とは、海外種鶏に戦いを挑んだときの静一の言葉である。日本の農業技術者すべてが心に刻んでおきたい言葉である。

（農林水産技術情報協会顧問）

自著を語る

地産地消マーケティング

二木　季男

本書では、地産地消活動がこれからさらに組織的、戦略的であるためにいくつかの提案をした。一つは、地産地消の起こりである「住んでいるところの四里四方のものを食べて暮らせば達者（健康）でいられる」という原点を忘れてはならないこと。二つは、この活動が将来の環境保全型農業への道づくりを支える消費者との真の共生関係づくりの活動であること。三つは、直売所など各種のアグリビジネスとしっかりと手を結んで、有利販売、付加価値販売を推進し、その成果を農業所得の向上と張り合いづくりに生かすべきこと。

四つは、この活動は、地域需要（顧客）の創造に向けた理に叶ったマーケティング活動であり、結果として食料自給率の向上が図れること。五つは、この活動の推進体制は、市町村にしっかりと根を据えたもので、息の長い活動であるべきこと、などである。私も皆さんと一緒に歩き続けたいと願っている。

（農業・農村マーケティング研究所長）

▽定価＝1680円（税込み）

▽発行所＝家の光協会（〒162-8448　東京都新宿区市谷舟河原町11）

新刊紹介

「虫見板で豊かな田んぼへ」　宇根　豊著

田んぼに生息する虫の観察に役立つ虫見板。環境に配慮した稲作に欠かせない農具である虫見板の作り方や使い方を解説する。

▽定価＝1470円（税込み）

▽発行所＝創森社（〒162-0822　東京都新宿区下宮比町2の28の612）

「デルフィニウムをつくりこなす――生育習性と開花調節の実際」

勝谷　範敏編著

複雑とされるデルフィニウムの開花生理を実験データから解説。切り花を安定出荷できる要点などを作型や系統別に詳細に紹介する。

▽定価＝2700円（税込み）

▽発行所＝農山漁村文化協会（〒107-8668　東京都港区赤坂7の6の1）

「農から見た日本――ある農民作家の遺書」

山下　惣一著

農業・農村の近代化で失ったものは何か。1936（昭和11）年生まれの著者が実体験から農政の問題を指摘。永続的な農業の回復、循環への転換を訴える。

▽定価＝1575円（税込み）

▽発行所＝清流出版（〒101-0051　東京都千代田区神田神保町3の7の1）

芸術

高橋　プラタ

山形生まれ　1932年の5歳の時に、金属加工業を営む両親とともに上京し71年に結婚して、千葉に移り住むまでの約20年間を東京の下町で過ごしました。小さな町工場がひしめく工業地帯でした。当時、家の前の道路を、馬が糞を落としながら引かれていくことを覚えているくらいですから、家の周りにも畑があったのだと思います。しかし私には畑を見たという記憶がありません。興味を持つことがなかったので、目に映らなかったのだと思います。そんな私がなぜ今「農」を追い続けているのか、ほんの数年前まで「農」と「私」との接点など考えることすらできないことでした。

10年ほど前、絵画の勉強にと一眼レフカメラを買い、初めて撮った写真が町の公募展でトップの「町長賞」を受賞。それがきっかけとなり写真の世界にのめり込んでゆきました。

写真家として自立をしたいと思いテーマを探していた3年前のことです。山梨県上九一色村で一人の老人が「市町村合併で、私の村が無くなる」と寂しげにつぶやいた一言が「農」と「私」を結びつけたのです。合併という大きな流れの中で「村」がどう変わってゆくのか「写しとめておきたい」との思いから、私は地図上に「村」と付く名前を探し「村人、村の様子」を撮りに車を走らせたのです。

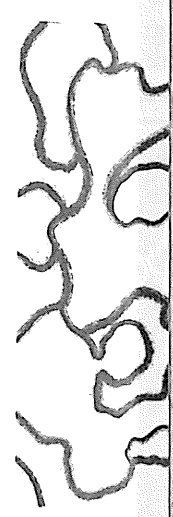
しかし昼日中、出会うのは畑で嫁の来てかたい　安全性不確かな輸入農産物の拡大など多くの問題がありました。私はそのときに自分の探し求めていたテーマは「農」であると悟ったのです。

本年2月20日から3月4日まで個展「東京近郊で生きる農民たち」を東京・新宿の「ペンタックスフォーラム」で開催しました。また11月末には東方出版から写真集を出版します。

大地で汗する農民たちの今の素顔を発表させていただき「農業」に光を当て、その裏にある多くの問題を、ひとりひとりが自分の問題としてとらえてくださることにより、農業活性化、農業再生の一助になればと、今日も私は「日本の農」を撮り続けています。

（写真家）

レンズ越しに見た農村の現



そんな友人の一人がこんなことを言った。

「僕は最近絵を薬にしているんだ。」

絵を薬にするとはどうゆうことか聞いてみると、おおよそ次のしくみで伺ったことのある「アオギリ」の樹木名が間違っているとの指摘を受けました。調べてみたら私の思い違いで、この木はプラタナス、和名では「スズカケノキ」でした。謹んでお詫（わ）びいたします。

暮らしのインフォメーション　今年は国際コメ年

岩手中央農業協同組合

会長理事　小笠原　一行
代表理事組合長　長澤　一泉
代表理事専務　藤尾　壽東
代表理事　熊谷　健一

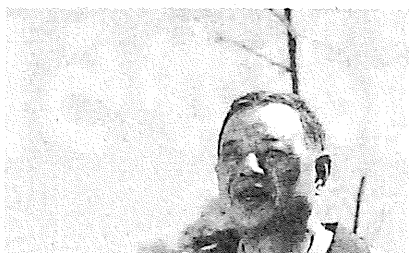
無農薬の生

※植物活性剤（国産
（この価格は
※腐葉土（有機栽培
（無農薬野菜を生産

お問い合わせは　26年間無
ばんじろう
和歌山県那賀郡

千凛（せんりん）茶

晩酌が楽しめる甘い物も口にする



「半年前のことを思う実に幸せな毎日」と話さん（神奈川県・69歳）がそこそこは飲めるようからだ。晩酌抜きの食さを感じていただけに、足取りがまるで違う」。

しかも鶴田さんは甘で、最近はそちらも口

それもこれも、天然の『千凛茶』（せんりん合ってからすべてがた。糖が安定したこと動き、足が軽くなった。いと2時間ほど歩くが、疲れを感じないという。